

編集後記

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』第6号が、無事、刊行の運びとなった。今号から、当センターの専任教官として、新たに河野貴代美教授が編集委員に加わっている。執筆者をはじめ、査読者らほか関係各位に感謝を申し上げたい。

本号では依頼論文として、海外から、オーストラリア・カーティン工科大学のヴェラ・マッキー教授、オランダ・ライデン大学のカルラ・リッセウ教授にご寄稿いただいた。それぞれ、2002（平成13）年度から2003（平成14）年度にかけて、当ジェンダー研究センターに外国人客員教授としてお招きした先生方である。

ジェンダー研究センターでは、こうした客員教授らによる講義を広く学内・学外に門戸を開くよう努めている。寄稿論文は、その一連の講義（「夜間セミナー」と呼ばれる）を通じて、参加者らの熱気を受けて思考された具体的な成果と呼ぶこともできるだろう。「夜間セミナー」や公開講演会にご参加いただいた方々には、当時の熱気を思い起こしつつ、知見を深めるべくお読みいただければ幸いである。

また寄稿論文としては、CMにおけるジェンダーを長期的に分析した、本編集委員のおひとりである坂元章助教授らによる共同論文を掲載することができ、投稿論文としては、政策と制度的現状を考察するものから、歴史的事象を通じて今日的な問題——ここでは、日本統治下台湾における植民地主義や大正期日本でのジェンダー概念の成立——の再考を促す二篇の、計三本の投稿論文が掲載されることになった。

翻訳には、開発とジェンダーを論じるうえでひとつの古典とも言える、モリニューのニカラグア革命を題材とした論文がここに初めて日本語として紹介される機会を得た。開発学にとどまらず、ジェンダー研究に携わる者に、広くこの論考が眼に留まることを願いたい。そして図書紹介では、編者自身による概説を掲載することができた。この機会は偶然の産物とも呼べようが、こうした偶然を呼び込む場として当センターが機能することは、広くジェンダー研究にとっても重要なことであるだろう。

なお、前号の『ジェンダー研究』にご寄稿いただいたアメリカ・ワシントン大学のタニ・バーロウ教授による「夜間セミナー」の記録が、『国際フェミニズムと中国』として、この3月に御茶の水書房より刊行された。ジェンダー研究センター客員教授による研究活動の一端が、人びとに広く知られ、共有される機会になればと願っている。

本号は、これまで数号にわたって編集業務に携わってきた長妻由里子（元研究機関研究員）から、バトンを受けたかたちで編集されている。ジェンダー研究を取り巻く環境は厳しく、当センターの業務は多忙を極める。センターの教官や研究機関研究員による論文執筆が叶わないままであったことは、当人がだれよりも切実に悔しい思いを噛みしめている。ジェンダー研究センターにおける活動を支えているのは、時に犠牲的な態度であることに慄然とさせられるが、こうした状況の改善は、ジェンダー研究の確たる発展とそのための条件の獲得によってしか成し遂げられないのかも知れない。

最後に、今後とも、地道な業績の積み重ねがバトンとして渡っていくことを切に祈りたい。

編集事務局 森本恭代（研究機関研究員）